

〈都市詠〉について考える 本田一弘

今、〈都市詠〉について考えるということは、世紀末を生きる〈私〉が、どこへ行くのかを問うことでもある。

一九九四年に出された山下雅人『世紀末短歌読本』（邑書林）の「空白都市」という文章から引いた。初出が「短歌往来」一九九一年三月号なので、文中の「今」は二十年以上前だが、その「今」を現在の二〇一五年に置き換えても十分通じる主張だ。いま、まさに「都市」とどのように向き合っても、歌うかという問題が重要であると私は考える。二十年以上も前に議論されていたことを現在進行形の話題として捉えるべきだ。

そのテクストとして阿木津英の第六歌集『黄鳥』（砂子屋書房）が最適である。この歌集の特色はざっくり都市詠である。都市における無機物が魅力的に歌われている。市街地、道路、ビルディング、歩道橋等々、他の歌集ではあまり目にしない語句も頻出する。

- ・市街地の路のおもては室内に差し入るやうなふゆの昼の日
- ・鉄格子板嵌むるところにかすかなる臭うごきたり臭を覆へど
- ・市街ひとつ隆起なす背をくだりゆき鉄蓋に鳴るしたたりの音

冒頭の「路」という題の連作三首である。一首目、市街地の路の表面に、室内に差し入るような冬の昼の日が差している、とうとう。一見、しずかな風景が淡々と歌われているようだ。だが、よく考えるとこれはいわゆる自然の風景ではない。人間が作り出

した都市の人工的なしずかな風景であるということに注目したい。二首目、「鉄格子板」とは、道路でよく見かける鋼材を格子状に組んだ溝蓋のことだろう（正確には「グレイチング」か）。作者はそこに、かすかな臭気を感じ取る。鉄格子板は「臭」を覆おうとするけれども「臭」はかすかに動き、「臭」を覆い隠すことはできない。鉄格子板という物を歌いながら、人間存在のありようを如実に表している歌だと思った。人間存在といったが、近代という時代のありようとも読める。近代が作り出した「鉄格子板」は時代自らがもつ見えない「臭」から逃れられないのだ。三首目は「鉄蓋」の歌。道路の上で見かける下水や汚水のマンホールの鉄製の蓋のことである。鉄格子板同様、「鉄蓋」はまさに近代化の象徴とっていいだろう。阿木津は、視覚、聴覚、嗅覚といった身体感覚を十全に駆使して都市の風景を詠み、人間の存在そして近代という時代がもたらしたものについて考えている。

・いつこより痛苦ひびくや街濡れて寒のあめ降るゆふくれかたに

震災後の東北のある都市の風景を詠んだ歌だといってもおかしくない。が、実際この歌は二〇一一年三月一日以前に作られた歌だが、作者は「どこか遠くから響いてくる痛苦は、未来からのものだったのかも知れない。」と「あとがき」で述べており、この歌は予言を秘めているとあらためて実感する。

震災そして原発事故によって都市の外面的な姿は変わりつつあり、そして都市の空間も変容した。震災から四年。震災以降の「都市詠」も大きく変わったはずだ。改めて「都市詠」を捉え直す時期が来たようだ。冒頭に引いた山下の言葉に倣って言えば、震災以降を生きる我々が、どこに行くかを問われているのだから。